

(3) 話題提供「昭和南海地震の様子について」

真砂 勝巳（新庄愛郷会 会長）

新庄愛郷会会長をやらせていただいております、真砂勝巳と申します。わたしは、昭和5年、1930年5月1日生まれですので、満85歳と3ヶ月となります。

それでは、昭和の津波の経験を話させていただきます。昭和21年12月21日午前4時19分、今まで経験したことのないような大きな揺れで目を覚ましました。すぐに父親が私に向かって、「家の前に出て、高雄山の方向を見て、稲妻のような光をしていないか、またドーンというような大きな音はしていないか、確かめなさい」と言いました。高雄山は、私の自宅から東北東にある約606mの山です。私はすぐに着の身着のまま表に飛び出て、その方向を見ますと、本当に稲妻のような光が走っていました。それから、ドーンという音も、4から5回遠くの方から聞こえてきました。すぐに父親にその話をしますと、「お前らすぐ手車を持って家の前の山方に逃げろ。わしもおばあ（77歳の当時の父親の母）を背負って一緒に逃げるから。」と言うので、すぐに出たわけです。それで、私の家族は9人全員が、無事に避難したわけでございます。避難場所で少し落ち着いてから、私は親父に「なんでこの前の山に来たんだ？」と聞いたんです。私の家の後ろに裏山があり、1分か2分くらいで行けるんです。そこを間違ったんじゃないかと話をしたんですけど、父親は「その峠はきれいだし、前の山方は自宅から5,6分かかかる。しかし、ここは昔の新庄村の中山城という城があった高台だ」と。そして「すぐ近くには東光寺という新庄唯一のお寺がある。ここには、水もあるし、食べ物もある。やっぱり逃げるにはそういう所へ逃げるのが1番安全である」と。避難が長くかかるとやっぱり水も食べ物もなかった所は大変なことになります。そういうことを想定して、父親は「逃げるんだったら、時間がかかるけど、前の山方へ行け」と話していました。それから、疑問に思ったので、「地震のときに稲妻とかそのような音がするのは、これは何か関係あるのか？」と聞いたんです。そしたら、父親は「わしはそれは分からん。しかし、昔からそういうふうに言われている」とのことでした。



真砂 勝巳さん

先ほども申しましたように、やっぱり『遠くても、少し時間的に余裕があれば、出来るだけ高いところへ逃げる』というのは当然のことで、昔の人は家庭の中で教えられてきたこととございます。新庄の人達は昔から教えられたことに従って避難したことが、今から考えますと良かったと思います。

もう1つは避難の途中でございますけれども、遠くの方で「津波だぞ」とか「津波が来るぞ」「早く逃げろ」ということを、男の人が大声でみなさんの中に呼びかけていたということがありました。そういうことから、当時は新庄村としてお互いに助け合うということが徹底されていたんだという感じがいたします。それはなぜかと言いますと、この津波は昭和21年ですから、終戦間もない時期でございます。それで、戦時中の隣組という一つの助け合いの地域の仕組みが残っていたことが大きかったのかと思います。

それから、津波の翌日の12月22日ですけれども、私どもの家が床上60cmあまり浸水いたしましたので、その後片付けを家族総出でやっておりました。そこへ、祖母の親元から男の人数人が手助けに来てくれたわけでございます。その男の人は、潮に浸かった米俵が10数俵あったわけですが、これを納屋から持ち出して、新しい米といくらも変わらないということで持ち帰っていただいたということ

脇本 祥司 （新庄公民館 主事）

真砂会長がお話くださいました南海地震当時の写真になります。こちらが鉄道の線路です。こちらに見えるのは新庄駅の駅舎です。降下しているのがわかると思います。この斜めに走っているのが、国道で、国道を船が遮断しているのがわかると思います。こちらが文里湾といいます。いまの写真をとった高台に避難している人たちです。当日の早朝の写真です。こちらに一人、男性がいるんですが、この方が柏木さんといいます。これが現在の写真です。こちらに新庄駅がありまして、先ほどの高台から写真を撮りました、当時は文里湾入口、ここはまだ海で、現在は埋め立てをしております、文里湾の入り口がだいぶ狭くなって津波に強くなっております。こちらは一時避難場所として、避難場所となります。こちらの当時避難した場所より少し離れているんですが、いろんな角度から避難して来られる少し高めの高めにつくった避難場所をつくっております。この辺に真砂会長のお宅があります。こちらが津波の水がひいたときの新庄駅付近の写真です。大きな船が流されてきているのがわかります。こちらの写真が名喜里地区といまして、新庄公民館のある近くです。この名喜里の川に漂流物が流れて川を止めている状態です。ここの地区もいまの海拔は1.7～1.9mくらいの高さです。こちらも同じく名喜里地区の旧道です。この道のすぐ横に公民館があります。簡単ではありますが、南海地震の写真でした。

続きまして、新庄地域の防災についてお話します。新庄地域の防災意識の向上に関わられた柏木について少しお話します。柏木さんが平成8年に新庄公民館館長として公民館にいたときに地震の話になりまして、遊びにきていた子どもたちに「地震が来たら高台へ逃げるように」と言ったところ、子どもたちは「津波が来たら、泳いで遊ぶ」と言ったそうです。それを聞いた柏木さんは、子どもたちがあまりにも無関心なので、啓発が必要であると思われたそうです。そこで、過去何度も津波の被害を受けてきた新庄の歴史や、当時のご自身の体験談を子どもたちに話すことによって意識を高めてもらいたいと考えました。そこから柏木さんが小学校へ少し時間をいただけるようお願いしに行き、毎年12月21日の津波のあった日に小学校で震災の話をすることを続けて



脇本 祥司さん



いました。その頃に、中学校の地震学が始まり、小学校で柏木さんから話を聞いた経験のある生徒たちが中学生になって、あらためて柏木さんに中学校でも話をしてもらいたいと頼みに行ったそうです。これらの柏木さんの活動は現在でも引き継がれています。本日、午前中に中学校で新庄地震学の授業をご覧になられたと聞いています。テーマごとにわかれて今年度の新庄地震学が行われているかと思います。公民館では地域の方々とともに防災に向けて取り組めるよう数年前、かまどベンチをつくりました。新庄地震学発表のときに、かまどベンチで漁協の女性部の方に協力をいただき、実際に炊き出しをおこなっています。来場者に振る舞うことによって、新庄地域の方々に、新庄地震学に取り組んでいる姿を見てもらい、内容を知っていただくための呼び掛けを行っています。また、新庄地震学発表当日に登校時間に避難訓練を行うようにし、新しくつくられた避難通路を通して避難場所である新庄中学校へ避難していただくなど、地域の方々にも参加していただいています。その後、新庄地震学の発表をご覧いただくなど、地域の方々にも広く意識をもってもらう工夫をおこなっております。

このようなコツコツした取り組みが東日本大震災の大津波警報発表時にあらわれ、田辺市で最も多い200人以上の避難者をかかえました。また、中学生が率先して避難者のお世話をしていたそうです。いままでの取り組みが生徒はもとより地域住民の防災意識を高めていることにつながっていると考えます。今後もこのような取り組みを続けていくことが必要だと思えます。